



Title	豪雪過疎地域の除排雪における自助共助に関する人類学的研究Ⅱ
Author(s)	小西, 信義
Citation	北海道の雪氷, 31, 7-10
Issue Date	2012-09-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56279
Type	journal article
File Information	2012_snowhokkaido31_01_konishi.pdf



豪雪過疎地域の除排雪における自助共助に関する人類学的研究Ⅱ

Anthropological Study on Mutual Cooperation for Snow removal in a Depopulated and Heavy Snowfall Area Ⅱ

小西信義 (北海道大学大学院文学研究科)

Nobuyoshi Konishi

1. 研究の目的・フィールドの概要・調査方法

除排雪の担い手の減少と高齢化は、寒冷過疎地域では切実な問題である。この問題に対し、小西¹⁾²⁾は、岩見沢市美流渡地区のフィールドワークにおいて、豪雪過疎地域という自然・社会環境を背景に、利己的・利他的に偏らない互惠性の思考の発動により、美流渡の除排雪活動が展開され、雪害リスクを減らしていることを実証的に明らかにした。本研究では昨年に続き2012年寒候期、同地区で人類学的視点からのフィールドワークを展開した。主な調査の焦点は、年々違う自然環境の中で、人びとの雪への適応の違いを描き出すことであった。

美流渡地区は、北海道岩見沢市街から15km程に位置する約1km四方の範囲が山に囲まれた盆地にある年間積雪6mを越える小集落である。362世帯人口632人が暮らし、そのうち48.7%が65歳以上の高齢地域であり、高齢者の大半が年金受給者である。2006年の合併で岩見沢市に編入された。全道の統計から見ても典型的な特別豪雪・過疎地域である。かつては炭鉱街であり、明治期からの採炭開始から平成元年の閉山までの約85年に渡り、最盛期の人口は1万人を越える街であった。閉山を契機に若者の人口流出が進み、除排雪の担い手が減少していき、現在は近隣のボランティアによって独居高齢世帯の除排雪が行われている。美流渡にある家屋の屋根の形状に関して、無落雪住宅である「フラット」が12.2%で「切妻」をはじめとする自然落雪型住宅が残り占める。

本研究は、対象とする集団の各個体を同定して識別し、観察対象の時間的・空間的な設定を行いながら観察者が自分の目で観察し、観察者が対象と同一化し、世界を内側から経験する経験的観察方法²⁾で行われた。具体的に言えば2012年1・2月の25日間の美流渡滞在と住民10人の除排雪活動の帯同と直接観察が行われた。ただし、2月22日・23日はR・K氏のお通夜および告別式の運営委員のお手伝いを行った。

2. 2011年・2012年寒候期における気候の違い

右表（気象庁統計より著者作成）によれば、2012年は気温・降雪量ともに昨年よりも過酷な状況であった。特に、元来この地域の降雪は、12月下旬から2月上旬に集中するはずだが、今年に至っては、11月から2月まで止むことはなく、人びとを苦しめた。また、1・2月には1970年以来の最深積雪量記録を立て続けに更新した。

美流渡では、市街地へ向かうバスの運行休止

表-1 2011年・12年寒候期の気象

		気温(℃)		雪(cm)		大気現象 雪日数
		日平均	合計	降雪 最大	最深 積雪	
2011年 寒候期	11月	4.7	19	14	12	5
	12月	-0.4	63	30	28	22
	1月	-5.7	337	33	133	30
	2月	-2.9	90	12	116	23
	3月	-0.8	107	16	94	24
	月平均	-1.0	123.2	21	76.6	20.8
2012年 寒候期	11月	4.4	142	53	61	14
	12月	-3.9	346	40	129	30
	1月	-7.1	237	34	194	30
	2月	-6.2	217	33	208	28
	3月	-1.6	77	10	174	23
	月平均	-2.9	203.8	34	153	25.0

(市街地への道路は道道38号線しかない)、死傷者の発生、無人家屋の倒壊・屋根雪の雪崩という事例が確認された。このような目に見える影響だけではなく、人びとの行動や思考にも今回の“雪害”は大きな影響を与えた。過疎地域に見られる、少子高齢化に伴う除排雪の担い手の不足や日常生活の直接的な影響はより深刻化・顕在化した。

3. 個人に見られた変化～耐える人・援助を求めだす人・援助を求める援助者～ 耐える人 (S・K氏の事例)

2012 年寒候期調査ベースとしてお世話になった S・K氏 (77 歳・女性) の家屋は1 月上旬から「かまくら」(S・K氏談) 状態となった。かつて炭鉱会社の職員住宅で切妻型の木造平屋は、従来、屋根上の積雪と屋内暖気による自然落雪が一冬の間繰り返され、窓下を越えるか越えない程度に積雪が溜まる程度で一冬を越す。しかし、今冬はそのサイクルの許容範囲を越えてしまい、1 月上旬で屋根下積雪は窓を完全に覆い、とうとう屋根の雪庇と密着してしま



図-1 S・K氏宅玄関前

まった(図-1)。屋根雪は当然自然落雪する場がなく、屋根に留まり続け、その上にさらに積雪が押し掛かるという悪循環であった。心筋梗塞での入院歴、糖尿病の既往症をもつ彼女は、最近不自由を感じ出した左股関節を気にしながら玄関から公道までの一本道をただ毎朝除雪するしかなかった。同町内会には娘孫家屋もあるが、通勤・通学のため彼らの助けは得にくい状況であった。彼女はこれまで他者に除排雪を依頼したことはなく、「頼み方もわからないし、逆に恐縮」と調査者に頼むしかなかった。

援助を求めだす人 (M・M氏の事例)

M・M氏 (84 歳・男性) 宅は入母屋型の木造二階建家屋である。既往症の糖尿病に加え、体調を崩していた彼は1 月中旬まで自力で除排雪を行っていた。しかし、今冬の豪雪は彼には手に負えなくなり、家屋全体は雪に覆われ、通院に使う自家用車も雪に埋まってしまった。M氏は1 月中旬N・K氏 (80 歳・男性) に援助を求めた。M氏はK氏による除雪作業の前に手間賃の交渉をK氏や調査者に求めた。K氏は「やった量に応じて言い値でいい」というが、M氏は「相場がわからないから、そちらで指定してほしい」というやり取りの上、K氏は3 人の援助者による屋根の雪下しを1.5 万円で引き受けた。

援助を求める援助者 (N・K氏の事例)

N・K氏 (79 歳・男性) はこれまで町内会長を勤め、隣家を除雪ボランティアしていた。自宅の屋根雪下ろしは行う必要無く一冬を越していた。しかし、2 月19 日早朝、K氏家屋に隣接する平屋倉庫の鉄筋が屋根雪の重みで歪みだした。K氏は美流渡の友人たち(彼らも除雪ボランティアをしている)に連絡を取り、倉庫屋根雪を下ろした。午前歪む鉄筋を支えていた丸太(図-2)は、屋根雪の重みから解放され、雪下ろしが終わる夕方には倒れていた。



図-2 N・K氏宅倉庫

以上、深刻化する降積雪に適応できなくなった人びとが確認された。それはつまり、

従来の個々人の中にあった除排雪活動の許容量を上回ったことで、個人の除排雪行動戦略¹⁾が機能しなくなったことを意味する。行動戦略が機能しなくなった人びとはただ降り積もる雪に対し、雪の重みで割れた窓ガラスを見ながら耐え忍んだり、これまで援助を求めたことがなく途方に暮れようやく援助を求めたり、本来援助者であるにも関わらず他者の援助を借らざるを得なくなったりしたのである。このような変化は個人だけではなく、集団全体の除排雪行動戦略にも大きな影響を与えた。

4. 集団に見られた変化～互惠性の揺らぎ～

深刻化する降積雪は、援助者の思考を大きく変えた。これまで地域内の除雪ボランティアを率先して行ってきた人びとが、来年からの除雪ボランティアを辞退することを除雪ボランティア同士で取り決めた。彼らは自分たちが辞退することで町内会内のボランティア活動が終了してしまうことも知っており、「来年からは街（岩見沢市街）の商売人（雪下ろし業者）に頼んで欲しい」と言っている。従来は、降雪した早朝、援助者は被援助世帯の玄関前の除雪・家屋周辺の排雪を行い、自宅に関しては昼間に後回しにしてきた。また、除雪機が積雪に足を取られぬよう、一冬計画的に隣家自宅の除排雪を一手に引き受けてきた。しかし、彼らはこの毎冬の圧力に疲れきってしまったのである。本人たちも高齢化し、自宅の除排雪だけではなく、隣家の除排雪を行うことに限界を感じたのである。

彼らの決意は、2月19日の友人の死でより固まった。R・K氏（享年79歳・男性）は当日朝、友人N・K氏の倉庫鉄筋が積雪の重みで歪みだしたことを聞きつけ、1月に腎不全から退院したばかりの身体も省みず屋根の雪下ろしをその他友人たちで行った。屋根の雪は突如ミシミシと地響きを上げながら崩れ落ちた。友人たちは雪に埋もれたR・K氏を必死で救い出すも5時間後病院で息を引き取った。出血性ショック死だったという。このような結果を、N・K氏は「高くついてしまった」と落胆するしかなかった。N・K氏も今年いっぱい除雪ボランティアを辞退した人びとのひとりである。

深刻化する降積雪により、これまでの除排雪をめぐる共助の行動戦略は機能しづらくなった。「好きな美流渡にいたい」・「助けて欲しい」という隣人がいることを知っておきながらも、他者を「ほっとけない」という動機からはじまる他者への援助が途絶えることは、援助－被援助関係の破綻を示唆する。個人の行動戦略を上回る自然環境は、他者を気遣う余裕を奪い、利他的行動を抑制してしまい、互惠性を基盤とした互惠的行動が発動しづらくなってしまったのである。しかし、これは美流渡の人びとの互惠性が消滅してしまっただけではない。

23日、遺された友人たちは150名近くの参列者の葬儀を、葬儀会社に一任することなく、葬儀会社に「美流渡のやり方」を主張しながら送った。「美流渡のやり方」とは、従来町内会の隣人たちで葬儀一式（参列者手配・歓待、祭壇準備等々）を行うことであるが、会場手配・設営、香典返し準備、火葬手続など自身たちでできるもののできる範囲で行った。友人のひとりであるI・S氏は「イスを並べることでRさんへの感謝の気持ちを示すことになる」と言った。葬儀委員長は友人たちに「Rさんは美流渡でこれだけ慕われたことを（普段のK夫妻の姿を知らない）遺族に見てもらい」と協力を求めた。R・K氏はこれまで町内会長・民生児童委員・除雪ボランティアを40年以上行ってきた美流渡の象徴的存在であった。友人たちは葬儀会社に葬儀を一任するのではなく、葬儀会社の力を借りながら彼らのできる範囲で「友人を送る」ことに努めた。

イスを並べたり、香典返しの準備を黙々と行いながら、それぞれ故人から生前もらった“恩”を感謝の念を込め返礼していたのである。除排雪活動の援助－被援助の関係が崩れようとも、彼らの互惠性の思考はしっかりと集団生活を支える心（心の社会性）に刻まれているのである。

5. 結びとして

上述したものは美流渡の現実であり、他者の援助なくして生活が困難な人びとと他者への援助を辞退しようとする人びとは、今後が増えるであろう。かつて、美流渡の除排雪は炭鉱社会のときは家庭内で処理されたが、閉山による少子高齢化によって、除排雪が困難に

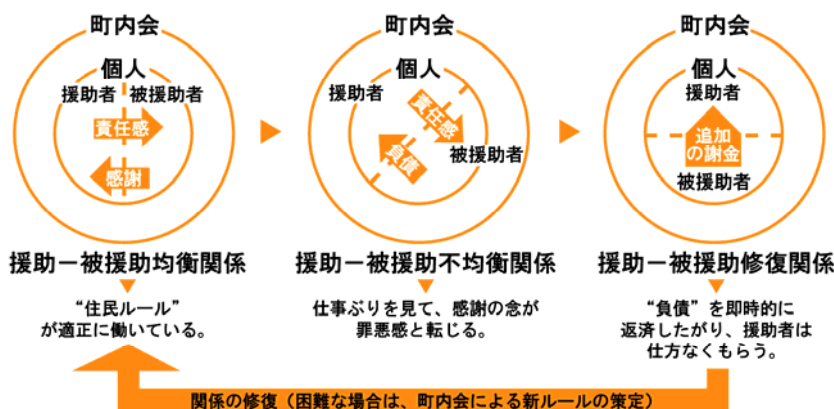


図-3 除排雪活動に見られる互惠性の思考

なった人びとは町内会へと援助を求めた。社会が変化するにつれて、個人（家庭）から集団（町内会）に幅を広げ、毎年の降積雪に適応してきた。そこでは、集団の中で個人がどう振る舞うかが問われ続けた。決して利己的に陥らず、「美流渡で困ったときはお互い様」というわかりやすい社会的規範の中、互惠的利他主義を貫き、集団の利益を尊重しながら個人の利益を保ってきた。それは、援助者と被援助者が同等の人間関係を維持しようとするやり取りの中見出された¹⁾²⁾（図-3）。しかし、深刻化する降積雪に対し、これまでの除排雪をめぐる自助・共助の行動戦略は機能しづらくなり、この行動戦略の基盤となる心の働き（互惠性の思考）も発動しづらくなった。

これまで人間の生み出した克雪の文化が「心の社会性が人類進化史的に文化・生態との間に動的関係を持つ中で、人間が所与の課題解決状況に対応するための行動戦略として開発、調整、伝達されてきたものであるという側面を持つ」⁴⁾のであれば、美流渡のような地域内集団の互惠的行動が機能しなくなってきた地域はきっと更なる大きな集団と互惠関係を築きながら、この現実に適応していくのであろう。その“更なる大きな集団”が、自治体であるか、NPOなどの公共的な民間団体かどうかはわからない。ただ一つ言えるのは、我々研究者の知見が貢献できる日はそう遠くないはずであるということである。

参考・引用文献

- 1) 小西信義, 2011: 豪雪過疎地域の除排雪における自助共助に関する人類学的研究. 北海道の雪氷, 30, 55-58.
- 2) 小西信義, 2012: 北海道, 岩見沢市美流渡の除排雪活動における人類学的研究. 北方学会報, 16, 2-13.
- 3) 煎本孝, 1996: 文化の自然誌, 東京, 東京大学出版会, 16-28.
- 4) 煎本孝, 2010: 人類の進化と北方適応. 文化人類学, 74, 4, 541-565.